

# 月刊ネット時評

11月



お生 ひろ 山形 浩 (評論家)

文化

当然のことながら、ネットが普及するにつれて「ネット論壇」も変化する。このコラムも当初は、現実世界とは隔絶したネットの片

## 現実世界に大きな影響及ぼす

隅で行われているおたくたちの風変わりな議論を、動物園の珍獣を見るように見物しようという意図があったように思う。だがいまやネットの議論はリアル世界と相互に影響しあうだけの力を持つに至っている。それを感じたのは、この十一月に急激に展開した、デフレ関連の動きを目的の当たり

で、物価が持続的に下がり続ける現象を指す。待っていれば物価が下がるので、人々は買物をするべく先送りしたがる。でも、みんなが買物を抑えたら、経済全体では不景気が生じる。いまの経済停滞や失業率の上昇などは、ほとんどがこのデフレの副作用だといえる。それを解決するには、

毎月1回、山形浩生、明治学院大学教授の稲葉振一郎、批評家の宇野常寛の3氏が交代で執筆します。

今人気の勝間和代氏だ。彼女がなぜ急にデフレに関心を持ち、それを何とかせねばと思うに至ったのかはまったくわからない。ぼくは勝間氏のよき読者ではないが、それまでの彼女はマクロ経済政策的な不景気対策よりも、個人の努力での景気回復をというナイーブな立場だったように思う。そ

もようやく、デフレの書もきちんと述べた解説が載るようになった。ネットでの動き、リアル世界での動き、政治の動き、そして既存マスコミの動き——それらがこの十一月には、デフレと日本経済をめぐってほぼ同時に動き、筆者をはじめとするリフレ支持者たちが十年がかりでもなかなか実現できなかった現実的な成果が生まれた。これは驚き以外の何物でもない。それがこれほど一斉

軽いインフレに戻すリフレ政策を採る必要がある。だがこれまでの日本政府や日本銀行はこのデフレの書をまったく顧みようとせず、対策を怠ってきた。そしてマスコミも(残念ながらこの毎日新聞は特に)それを指摘しないどころか、逆にデフレは物価が下がるからよいことだなどとうそぶいて、問題を悪化させてきた。

## 反デフレ論の広がり

それがある日ネット上で突如、彼女はデフレの書を訴え始めた。そして、リアルタイムのつぶやきシステムでも言うべきツイッターでも、デフレ対策を求める署名運動を開始。その直後に勝間氏は、菅直人経済財政担当大臣に対してデフレの書を直訴し、リフレ的な対応による景気回復策を主張する。そしてその数日後には、その菅氏が月例経済報告で、日本がデフレ状況だと

た(ちなみにそれをいち早く訳して日本に紹介できたのは、ぼくの数少ない自慢の一つだ)。初出が査読誌ではなくネットだったことは、この理論に対する中傷の材料になったのだが。だがその後の十年で、この理論は精緻さを増し、支持者も増えた。もはやネット発の理論だったことなど気にする人はいない。そしてその間に行われた議論が、この勢いでリフレ政策が実現されて日本がデフレを脱してくれば何も言うこととはないんだが……。

日本はかなりの長期にわたるデフレが続いていた。デフレとはインフレの逆

だがこの十一月に状況は一変した。その台風の目は、